

名作再読、拾い読み (18)

『シスター・キャリー』 ("Sister Carrie")

小澤 文彦

セオドア・ドライサー (Theodore Dreiser, 1871-1945) はアメリカの作家で、インディアナ州テレ・ホートにドイツ系移民の子として生まれました。父親は織工としてアメリカに渡ったのですが、努力して手に入れた工場を火災で失ったため、家族は貧困のうちに州内を転々として暮らし、最終的にインディアナ州北部のウォソーに落ち着きました。ドライサーはここで初めて公立学校に入学し、比較的安定した数年間を過ごします。16歳の時、単身シカゴに出て働き、1年間はインディアナ大学に通いますが、20歳の時、新聞記者の職を得ます。ジャーナリストとして修行を積み、各地で記者としての仕事をしながら東部へ向かい、途中ピッツバーグで7ヶ月の記者生活を送ります。ここで鉄鋼業の経営者と労働者の生活の格差を眼にして社会の矛盾を感じる一方、バルザックの社会小説やスペンサーの進化論哲学の本を読んで人生に眼を開きます。

1894年にニューヨークで「ワールド」紙に採用され、文筆家としての経験を積んでから、1900年に長編小説『シスター・キャリー』を発表しました。しかし、主人公キャリーの生き方が不道德と非難され、経済的・精神的に大打撃を受けて神経症に悩むようになり、その後数年は大衆雑誌や服飾女性雑誌の編集に従事します。

1910年に職を辞してから、『ジェニー・ゲアハート』(1911)、<欲望三部作>の第1部『資本家』(1912)、第2部『巨人』(1914)を発表しますが、『天才』(1915)が猥褻という理由で発禁処分を受け、暫く執筆は中断します。しかし、1925年に『アメリカの悲劇』を発表すると、「現代最高のアメリカ小説」と絶賛され、ベストセラーになりました。この後、ドライサーは1927年のロシア訪問と1929年の経済恐慌をきっかけに社会運動に関わるようになり、共産党系文化人として活発に行動し、著作も社会評論やノンフィクションが多くなります。1950年代の反共主義の影響もあって長い間、正当な評価を受けることが少なかったのですが、生誕100周年を迎えた1970年代以降に再評価の気運が高まり、現在ではアメリカ文学の父としてマーク・トウェイン達と同等の高い評価を受け、アメリカ自然主義文学最大の作家と見なされています。

今回は、『シスター・キャリー』をお薦めします。一世紀以上も前に発表された小説とは思えないほど現代に通じるものがあり、消費文化溢れる大都会の華やかさと共にその影の悲惨な実態にも眼を向けています。

田舎町に住むキャリーは18歳になったので、

シカゴにいる姉夫婦を頼って大都会で働こうとします。目覚しい経済発展を遂げた大都会の活気溢れる華麗な外面に戸惑いながらも、手に入れた仕事は環境劣悪な工場の中での低賃金労働。過労から発熱して仕事を休んだため職を失います。しかし、シカゴに来る途中、列車の中で出会った外回りの販売員ドルーエと運良く街中で再会し、彼と同棲することになりました。彼女は結婚を望むのですが、ドルーエにはその気がなく、彼の知人であるハーストウッドの方がドルーエ以上に自分を愛していることを知ります。ハーストウッドは、有名人のよく集まる高級酒場の支配人で、優雅な物腰のとても好感の持てる人物でした。彼は純真で美しいキャリーに心が惹かれていき、妻帯者であることを打ち明けずにキャリーと結婚の約束をします。しかし、ドルーエからハーストウッドが結婚していることを知らされたキャリーは騙されたと思い彼とはもう会おうとしません。ハーストウッドの妻はキャリーの存在を知って離婚訴訟を起こしました。そのような時に、店のその日の売上金が不注意から金庫に入れられないままになっており、ハーストウッドは閉店時の見廻りで偶然それを目にします。彼はその大金を持ってキャリーのところへ行き、ドルーエが怪我をしたと嘘をついて彼女を連れ出します。デトロイト行きの列車の中で彼は嘘をついたことを詫げ、事情を真剣に説明するので、初めのうちは怒り狂っていたキャリーも、遂に彼の気持ちを受け入れます。

二人はニューヨークで暮らし始めますが、ハーストウッドが酒場経営に失敗した後、生活は苦しくなります。仕事を探しても適当なものは見付からず、漸く手に入れたのはブルックリンで電車を運転するスト破りの仕事でした。一方、キャリーは踊り子の仕事についてから才能を認められ、とんとん拍子に運が開けて女優の道へと進んでいきます。彼女は無気力になったハーストウッドを見捨てて去っていきます。ハーストウッドはホームレスになり、最後は木賃宿でガス自殺を遂げてしまいます。キャリーは女優として成功しますが、彼女の心にあるのは孤独感と虚しさばかりでした。

参考文献

1. Theodore Dreiser "Sister Carrie" (World Publishing, 1927)
2. セオドア・ドライサー著、村山淳彦訳『シスター・キャリー』(上・下) (岩波書店、1997)

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)